The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヤオ族音楽文化に関する基礎的研究
Author(s)	李, 金叶
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44109
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【28】

氏　　名	李（リ）　金（キン）　叶（ヨウ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　17470　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**ヤオ族音楽文化に関する基礎的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　山口　修 （副査） 教　授　根岸　一美　　教　授　桃木　至朗

論文内容の要旨

本論文は、中国南部およびベトナム北部に散在するヤオ族（ベトナムではザオ族と呼ばれる）の音楽文化を相互に比較することによって、彼らの価値体系に探りを入れたうえで、その民謡の歌唱法や楽器の演奏法などの類似点と相違点、音楽文化の伝承過程、歴史的変遷などを究明し、さらにヤオ族を中心とする中国南部少数民族の音楽文化の形成と発展について展望することを目的とする。手法としては、文献を古代中国まで遡って吟味する歴史学に加えて、フィールドワークによる文化人類学・民族音楽学の方法をとり、それらのデータをつきあわせる。

本論は大きく4部構成をとり、全8章と結論から成る。第Ⅰ部「序論」では、第1章「研究の目的と方法」につづく第2章「将来の研究」において、対象とするヤオ族については質量ともに乏しいことを報告する。

第Ⅱ部「ヤオ族音楽研究における周縁への眼差し」は、研究をすすめるうえでの問題意識を二つの観点から表明することを目的とする。すなわち、第3章「ヤオ族音楽記録に関わる記譜問題について」において、本来楽譜をもたない文化を対象にするために民族音楽学者として記譜の手段をいくつか講じることの必要性を主張し、そして第4章「ヤオ族音楽研究に関わる周辺資料の調査」において、一見相互に関連のない資料といえどもなんらかのつながりを見出すことが理論的にあり得るので注意力をはたらかせる必要がある、とする。

第Ⅲ部「ヤオ族の打楽器を中心とする音楽文化」の眼目は、歴史学（音楽史学）と文化人類学（民族音楽学）という二つの方向性を融合する実践例を示すことである。そこで、第5章「ヤオ族の長鼓文化に関する分析」において、宋代や明代、清代の文献に見られる記述を現存の楽器に照合させることにより、この楽器の変遷史の解明を試みる。さらに第6章「ヤオ族の銅鼓文化に関する分析」において、唐代から清代にいたるまでの銅鼓に関する記述を現代のフィールドデータと比較して、この楽器に託される社会的機能が時代を超えて継承されていると判断する。

第Ⅳ部「ヤオ族の歌掛けを中心とする音楽文化」は、主としてフィールドワークによって収集した声楽曲に焦点をあてる。まず、第7章「各地域のヤオ族の民謡」でベトナムを含めて著者が訪れることのできた諸地域を比較することにより、交通不便な山地に住むが低地の漢族やキン族との交流が少なかったために楽器が少なく歌こそが音楽文化の中心をなしていた、と見解を述べる。次に、第8章「ヤオ族民謡の伝承と社会的機能」では、無文字社会であったため借用した漢字で歌詞を書きとめることは若干おこなわれるにしても、本質的に口伝心授が伝承の形態であることを確認する。まとめとして、結論「少数民族音楽文化の形成と発展：必要・吸収・継承・変化と新たなる展開」を記す。

（分量　本文 156 頁 400 字詰原稿用紙換算約 499 枚　付録（写真、地図、楽譜）、参考文献、日中英要旨等 76 頁）

論文審査の結果の要旨

広大な中国には少数民族が多数居住しており、とりわけ南部に密集している。ところが、それらの音楽文化の歴史や現状はいまだに知られざるまま残されているものが多いので、本研究がその隙間を埋めるべく基礎的なデータをヤオ族の歴史と現在の両面にまたがって示している点で高く評価できる。とくに、短期間とはいえベトナムにも足をのばして知見を広めたのは、今後推進すべき隣国同士の連携を示唆している。また、修士論文で中国音楽史の一端をさぐる文献研究を経験したうえ、博士課程入学後に民族音楽学的フィールドワークの手法を試行する際に、それらの手法を融合させようと意欲をもって対象に挑戦したことも、母国での当該学問の発展に寄与する可能性を秘めている。さらに、自身が漢民族出身であることを意識して、従来の漢民族中心的な態度を脱却し文化相対主義の影響を受けながら論を進めたことも歓迎される事実である。

しかし、上記のいくつかの研究態度は徹底して本研究で貫かれたとは言い難い。それでも、歴史研究、フィールドワーク、文化相対主義的方法実践いずれにおいても、ポストドクトラル研究活動において深める可能性は示されていると判断できるので、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。